



Title	ニブフ語と近隣諸言語との類型的異同・言語接触について
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed., 127-144
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/38306
Type	proceedings
Note	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
File Information	13kazama.pdf



[Instructions for use](#)

ニブフ語と近隣諸言語との類型的異同・言語接触について

風間 伸次郎
(東京外国語大学)

0. はじめに

本稿は前半部と後半部からなる。前半部ではニブフ語の類型論的な対照、後半部ではニブフ語とツングース諸語の言語接触を問題にする。

前半部は、特に文法に関して、類型論的な観点からニブフ語とその近隣諸言語の異同について対照を行うものである。近隣諸言語としては、特に朝鮮語とツングース諸語を重点的にとりあげる。必要に応じて、日本語、モンゴル語、アイヌ語、エスキモー語などもとりあげる。

後半部の言語接触に関しては、ツングース諸語（特にウルチャ語）からニブフ語への借用、もしくはその逆方向への借用をとりあげて論じる。

1. 文法に関する類型論的対照

筆者はニブフ語を専門とする者ではなく、わずかに1994年にアムール下流域でニブフ語の若干の調査を行ったことがあるのみである（なおその資料もまだ未整理である）。筆者はツングース諸語を専門としている。朝鮮語やモンゴル語、チュルク諸語などについても若干の知識を有しているので、主にこれらの言語の観点からみたニブフ語の類型論的性格について考察しようとするものである。本稿では、服部(1944, 1988)、高橋(1942)、渡部(1992)、アウステルリッツ(1990)などの記述に基づき、そこにみられる文法的諸特徴を他の言語と対照する。残念ながらPanfilovやKrejnovichの論文を消化する余裕が無かったため、皮相的な対照に留まっていることが危惧される。まずはこれを足がかりとして、今後さらなる検討を行いたいと考えている。なおツングース諸語や朝鮮語について、具体例を示していないが、それらの言語を対照した論考である風間(2003)にあげた記述ならびに具体例を参考にさせていただければ幸いである。

1.1. 先行研究

日本語との比較・対照を目的としたものにアウステルリッツ(1990)がある。これは音韻、形態、統語、意味の各方面からニブフ語の類型について説明している。アウステルリッツ(1990)には、「ソ連の学者でパンフィロフという人が、ギリヤーク語（ニブフ語のこと：筆者注）とツングース語の並行現象を研究し、」とあるが、筆者は未見である。Krejnovich(1955)もやはりニブフ語とツングース諸語の関係を取り扱っているが筆者未見である。他に他言語との対照的観点から全般的にニブフ語を捉えた論考はあると思われるが、筆者は現在のところ十分に把握できていない。

1.2. 名詞及び名詞のカテゴリー

1) 数

同じ複数接辞が名詞にも動詞にもつく点(服部 1988)では、いくぶん朝鮮語に似ている。ツングース諸語では基本的に名詞につく複数接辞と動詞につく複数接辞は異なっている。朝鮮語の複数要素は、文中の副詞や副動詞など、さまざまなものに自由につくことができるのに対し、ニブフ語のそれはもっぱら文末の動詞に限られるようである。このような状況はチュルク諸語の状況にもっともよく似ている。朝鮮語の複数要素は、名詞につく場合以外は常に主語の複数を示すが、ニブフ語で動詞につく場合には目的語の数と一致する場合もあるようだ(高橋 1942: 49-50)。

šanjka-xyn 「女-たち」、isn wint-xyn. 「あの人たちは 行った-複数」(服部 1955)

2) 所有構造

所有構造において、属格が不要であるのは日本語よりも朝鮮語に似ている。朝鮮語には属格があるものの、日本語のように義務的でなく、所属関係にある二つの名詞は単に並置される。ニブフ語では、後続する主名詞が閉鎖音の時、対応する摩擦音に交替するという特徴的な音交替の現象がある。朝鮮語では後続する主名詞の語頭子音が濃音化することがある。ツングース諸語やチュルク諸語とは異なり、主要部である被所有名詞につく接辞、すなわち所有人称を示す接尾辞は存在しない。

azmc-fřy 「男の山小屋」(fřy < přy 「山小屋」)(服部 1988)

3) 格およびとりたて

・具格と方向格が別形式である点(アウステルリッツ 1990)で朝鮮語とは異なる。

～へ -dox、～で -kis (アウステルリッツ 1990)

・使役の被使役者を示す特別な格があるが(渡部 1992)、そのようなものは近隣の諸言語には見られない。ツングース諸語では一般に対格が用いられる。

・「も」にあたる要素は全部否定にも用いられる(高橋 1942: 32)。この点では日・朝・ツングース諸語に似ている。

4) 数詞

・名詞+数詞が、全体として名詞句として扱われる点(服部 1988)は日本語・朝鮮語とも似ている。ツングース語ではこの語順は不可能である。もし名詞、数詞の語順をとれば、それぞれが格の形式を取り、一体とはならない。服部(1988)では両者の語順は自由であるとしているが、高橋(1942: 27)および服部(1955)を見る限りでは、名詞-数詞の順序が多く見られるようである。朝鮮語でもこの順序がふつうである。ツングース諸語ではふつう数詞-名詞

の順序で、助数詞は基本的に存在しない。数詞の語幹が動詞語幹として用いられることもあるようだ（高橋 1942: 28）。この点ではアイヌ語や北米インディアン諸語に似る。

tav n'axř-tox 「家一軒へ」、m'akř 「二つ」 > m'akrnd 「二つある」（高橋 1942）

5) 代名詞

・1人称複数における除外形と包括形の対立はナーナイ語、ウルチャ語、ウイльта語を除くツングース諸語に見られる。朝鮮語にもこれと似た対立があったとする説がある。

包括形 misn 除外形 nin（服部 1988）

・再帰代名詞が1、2、3人称代名詞と同じように扱われ、一つの体系をなしている（服部 1988）。ツングース諸語においては、所有人称接辞に再帰を含んだ体系があるが、人称代名詞と再帰代名詞ではその振る舞いが大きく異なる。

nytk(< n-ytk) 「私の-父」、přaf(< p-daf) 「自身の-家」（服部 1988）

・指示詞が動詞的にふるまう点（アウステルリッツ 1990）では朝鮮語に似る。

・「ずっと向こうの」という意味を示す時には、「向こうの」の意の語を引き伸ばして言う（高橋 1942:39）。このようなことがモンゴル語にも見られることを高橋（同）は指摘しているが、ツングース諸語にもやはり見られる。

・場所を示す後置詞は場所を示す格を取らずに用いられる（高橋 1942: 57-58）。この点で日・朝・ツングース諸語とは異なっている。モンゴル語にはこのようなものがある。日・朝・ツングース諸語ではしたがって場所名詞と呼ぶことができるが、ニブフ語のこの要素は後置詞ということになる。

1.3. 動詞及び動詞のカテゴリー

1) 動詞と形容詞

・動詞と形容詞がほとんど同じ形態論を示す（服部 1988）。言い方を変えれば、動詞は動作動詞と状態動詞に分かれ、形容詞という品詞は必要ない。この状況は朝鮮語に近い。日本語でも動詞と形容詞はともに活用し、用言とされるが、その活用に現れる形態素は両者で大きく異なる。さらに、かつて日本語では形容詞語幹はあまり活用する力がなく、むしろ名詞に近いものであったと考えられる。次の例に見るように、形容詞的な意味の語が「～になる」のような「変化」の意味で用いられる現象は朝鮮語に若干の例がある（keuda 「大きい、大きくなる」、bargda 「明るい、明るくなる」）。

bilynt 「大きい、大きくなる」、dakynt 「暖かい、暖かくなる」（服部 1988、なお表記を若

干変えた)

2) 形容詞の比較級

形容詞に比較級のある点 (服部 1988) が注目される。

do-nt 「太った、太い」、do-ly-nt 「やや太った」、do-la-nt 「たいへんに太った」 (服部 1988)

3) 動詞語幹

重複による動詞語幹の形成がある (アウステルリッツ 1990)。ツングース諸語、朝鮮語、日本語には見られない。

hac&ac- 「くしゃみをする」 (&は反復境界)、pla&fla- 「不思議だ」 (アウステルリッツ 1990)

4) 否定

否定要素が動詞である点 (服部 1988) では、ツングース諸語に似ている。しかしツングース諸語においては、否定動詞と存在の否定「ない」は全く関連のない形を示すのに対し (後述のウルチャ語の否定構造だけは別)、ニブフ語では同じである (服部 1988)。なおニブフ語の否定構造はウルチャ語の新しい否定構造の形成に影響を与えた可能性がある。ただ、ウルチャ語の場合、前項の否定される動詞は副動詞であって、ニブフ語におけるような形動詞ではない。

ni damx da-ŋ qavr-nt. 「私は タバコを のま ない」

hun řaŋq ycx qavr-nt. 「その 女は 夫が ない」

[ウルチャ語]

bii bakv-m kəwə. 「私は 見つけ ない」

mindu xai=daa kəwə 「私に 何も ない」

[ウデヘ語]

bii ə-i-mi saa. 「私は知らない (私は 否定動詞語幹-形動詞-1sg 知る)」

mindu jəu=dəə anči. 「私に 何も ない」

5) 態

・受身は再帰の接頭辞的な要素と使役との組み合わせによる (服部 1988) が、近隣の諸言語にはそのような形式の受身は存在しない。

ix-ku-nt / p-ix-ku-nt

殺させる 自身を殺させる (=殺される) (服部 1988)

・使役が主語不転換の機能を有する点（服部 1944）で、III 群のツングース諸語、エスキモ一語に似る。

従属節の動詞には使役動詞の説述形が用いられるものがあり、この場合語尾は従属節の主語ではなく主節の主語に対応する。

(i) ni: jaŋ ʔpřuŋ-ku-t ʔjindunt.

私は その人が 来たのを 見た

(ii) jaŋ ni: ʔpřuŋ-ku-r ʔnindunt.

その人は 私が 来たのを 見た

ni: jaŋax ʔpřuŋ-ku-nt は「私はその人を来させた」、jaŋ niax ʔpřuŋ-ku-nt は「その人を私は来させた」であって使役の意義を持つが、haFu ʔke: ʔjaŋax ʔpřuŋ-ku-nt は「そうする中にその人を来させた」ではなく、「そうする中にその人が来てしまった」であり、tʃax ʔjinin-ku-nomu misn win ʔda: は「おまえに食べさせてから我々は行こう」ではなく、「おまえが食べてから我々は行こう」の意であってギリヤークはこれらの叙述に対してなら使役動詞としての意義を感じていない。同様のことが例(i)及び(ii)の叙述について言われる。

（服部 1944）

・相互的な行為を示す動詞には接頭辞的な要素 w- が現れる（服部 1944）。アウステルリッツはこれを相互代名詞の化石化したものと見ている（アウステルリッツ 1990）。ツングース諸語には相互態を示す接尾辞があるが、相互代名詞は存在しない。

6) アスペクト

反復、多数、多回などのアスペクト的意味は、動詞語幹の重複により示される。ツングース諸語では言語にもよるが何種類かのアスペクト接辞が用意されている。ニブフ語では完了のアスペクトには -ayar などの語幹拡張接辞があるようだ（高橋 1942）。

7) 時制

ニブフ語では現在と過去を区別しない（服部 1988）が、ツングース諸語、朝鮮語、日本語では基本的に動詞の形の連合的対立によりこの対立を示す。ただしツングース諸語の中でも、ウデヘ語やエウエン語の定動詞はやはり現在も過去も示し、これがツングース祖語でのかつての状況であった可能性がある。したがってこの点でニブフ語と共通する。

8) きれつづき

・服部（1988）のいう終止形 (-nt) には名詞的機能があるようだ（高橋 1942: 33, 34）。ゆえに高橋(1942)はこれを不定法と呼んでいる。ツングース諸語や朝鮮語の定動詞の形にはこうした機能はない。

・連体形は時制、人称を問わず、一形式 (-ŋ) しかない（ただし未来の形式は現れる）。この点で、いくつもの形式を持つ朝鮮語とは異なる。しかし、連体形で未来と現在／過去を

区別する点では類似しているといえよう。

mu-ŋ nikbyŋ「死んだ人」、pxui-ŋ nikbyŋ「[動作が未来に行われる] 帰る人」(服部 1955)

・副動詞形(説述形 verbal adverb: 服部 1988)が終止形として用いられる点(服部 1988)は、朝鮮語の -a/-e による形にのみ観察され、日本語やツングース諸語にはみられない点である。副動詞形では不完全ながらも人称が標示されるが、副動詞形を含め、動詞に人称標示がなされるという点ではツングース諸語と共通している。

他の動詞に先立つことなく、ふつう2つ以上の説述形の動詞がそれぞれ主語をもち、動詞的にはたらく。(中略)

ci caj ra-r ni damx da-t(< ra-t)

「君は - 茶を - 飲んだし - 僕は - タバコを - のんだ」

ci caj ra-r ni damx da-n(< ra-n)

「君は - 茶を - 飲むだろうし - 僕は - タバコを - のむだろう」

(服部 1988: 1413)

このような記述をみると、この説述形に標示される人称は、複文における指示転換 (switch-reference) としての役割を強く持っていることがわかる。

・副動詞形(説述形: 服部 1988)には現在形と未来形の対立があり、未来を示す文であれば、文中の動詞であっても未来形を用いる(服部 1988、ただし単数2、3人称では現在形と未来形は対立しない)。このことはきわめて重要であると思われる。いわゆるアルタイ型の言語では、文全体のテンスは文末の本動詞によってのみ標示され、文中の副動詞はこれを示す力を持たないためである。

Ni caj ra-ror wi-nt.

私は 茶を 飲んでから 行った

Ni caj ra-non wi-i-nt.

私は 茶を 飲んでから 行くだろう

逆に言えば、このことは説述形の動詞としての独立度の高さを示している。さらに言えば、上記のような文は、日本語の「～して～する」のような構造、すなわち先行する動詞が従属的な要素として後ろの動詞にかかっているような構造よりも、英語の「V1 and V2」のような並立的関係の重文構造と解釈すべきものではないかと考える。

9) モダリティ

・命令形に2人称単数と2人称複数の対立があり、両者の形は全く異なっている(服部 1988)。ツングース諸語にもこの対立はあるが、2人称複数に対する命令形は2人称単数に対する命令形に2人称複数の人称接辞を加えた形式である。

wi-ja 「(君は) 行け」 wi-be 「(君らは) 行け」 (服部 1988)

・Yes-No 疑問文の文末標識 (-nja) と疑問詞疑問文の文末標識 (-ly) は異なる (服部 1988)。ツングース諸語や中期朝鮮語、琉球語、古代日本語でも使い分けがある。詳しくは風間(2003)を参照されたい。

10) 主語に関する人称変化

ニブフ語の動詞における主語の人称標示は、説述形においてのみ、しかも単数2・3人称のみが、他の単数1人称および複数の各人称から区別される、といったきわめて不完全な形での区別である。

他動詞 ra-nt (飲む) を例にとって人称形態を示すこととする。

ア) 副詞的

i) 現在と過去の動詞を規定する形態

	普通形	完了強調形
単数第1人称／複数各人称	ra-t	ra-dot
単数第2・3人称	ra-r	ra-ror

ii) 未来の動詞を規定する形態

	普通形	完了強調形
単数第1人称／複数各人称	ra-n	ra-non
単数第2・3人称	ra-r	ra-ror

(服部 1988: 1413)

しかし、3人称であっても単数と複数に対立はあるし、単数2・3人称が同じ形というきわめて奇妙な組み合わせである。「3人称」とは、話し手でも聞き手でもないものとして消極的に定義されるものであるにも関わらず、このように数の対立があったり、2人称と一緒にあったりしていることを考えると、これらの人称標示が後から発達したものとは考え難い。むしろゲルマン祖語の動詞において1／2／3人称が単複において十全に対立していたものが、現代英語では3人称単数の標示を残すのみとなったように、変化形が合流・衰退して現在の状態に至ったものと考えたい。先にみたように命令形でも単複の対立があることはこうした考えを支持するように思われる。

11) (間接) 目的語に関する人称変化と抱合

この問題については、服部(1944)の下記の記述がたいへん参考になる。少し長くなるが、きわめて重要な記述であるので、そのまま引用することにする。

七、動詞には、単数の全ての代名詞と反照代名詞とを目的語として抱合するものがある。このような動詞は名詞および複数代名詞を抱合する時の形態によって三種に分ち得る。

単数のすべての代名詞と反照代名詞とを目的語とし、抱合する形態を仮に「代名詞活用」、複数代名詞と名詞とを目的語とする場合の形態を「名詞活用」と称する。前者にあつてはギリヤークは常に単数第三人称代名詞の抱合形(j-)を口にする習慣があるから、此処でもその例に倣うこととする。

(1) 見守る

'jabũnt		'abũnt	
'njabũnt	私を見守る	isn'abũnt	それらを／その人達を見守る
'tjabũnt	お前を見守る	bu:'abũnt	「夫を見守る」>夫を待つ
'jabũnt	その人を／それを 見守る	bis'abũnt	留守番をする

(2) 殺す

'jixũnt		kunt ~ xunt	
'nixũnt	私を殺す	miskunt	我々を殺す
'tjixũnt	お前を殺す	tjo:xunt	「魚を殺す」>漁をする
'jixũnt	その人を／それを 殺す	ŋa:xunt	「獣を殺す」>狩をする
'pixũnt	「自分を殺す」>自殺する		

(3) …を念頭におく

'juibũnt		'huibũnt	
'njuibũnt	私を念頭におく	pũtk huibũnt	自分の父を念頭におく
'tjuibũnt	お前を念頭におく	tjinhuibũnt	お前達を念頭におく
'juibũnt	その人を／それを念頭におく		

八、ギリヤーク語では**動詞の代名詞活用が厳密に行われる。**従つて、例えば 'jixmũnt (「その人に与える」) ~ 'himũnt (「・・・に与える」) [前項 七、(3)] の如き動詞を含む

ni: dun ok 'jixmũnt

は「私はこの衣服をその人に与えた」であり、

jaŋ dun ok 'nixmũnt

は「その人はこの衣服を私に呉れた」であつて、若し 'jixmũnt, 'nixmũnt の位置に 'himũnt をおこならば「私はこの衣服に与えた」「あの人はこの衣服に与えた」という荒唐無稽な叙述となる。

二つの目的語が共に名詞の場合には、名詞で示された「人」に関連する目的語はもう一度、代名詞となって動詞に抱合されなければならぬ。

ni: pjaxlaŋ dun ok 'jixmũnt 私は自分の子にこの衣服を与えた (<私は自分の子にこの衣服を「その人」に与えた)

若し「人」に関連する名詞を動詞の直前におくならば動詞は 'himũnt であつて、

ni: dun ok 'pjaxlaŋ 'himũnt

と言わねばならぬ。又、'pjaxlaŋ dox (子供に) の如く助詞を添えるならば動詞は代名詞を抱合して、

ni: dun ok 'pjaxlaŋ dox 'jixmunt

と言わなければならない。

(服部 1944、旧仮名遣いなどは一部改変、下線・太字は引用者による)

目的語の人称接頭辞とされているものに関して、中川(2003)は「もともと接辞だったのではなく、人称代名詞が縮約されて接辞化したものと見てよい」としているが、筆者も同様に考えていた。確かに歴史的起源はそうであったかもしれない。しかし上記の記述を見ると、これは単にアルタイ型の言語の名詞的な項(argument)が動詞との結びつきを強めてきたものとみることにはできない。もしそのようなものであるならば、文中に当該の目的語があれば、もはやそのような接頭要素は必要ないはずである。ところが服部(1944)が上に述べているように、「名詞で示された「人」に関連する目的語はもう一度、代名詞となって動詞に抱合されなければならない」のである。このことはアイヌ語で *kani ka ipe rusuy na. が非文であり、kani ka ku=ipe rusuy na. 「僕も 僕-食べたいな」のように言わなければならない(中川・中本 1997による)のと同様である。そしてさらに「'pjaxlaŋ dox (子供に)」のように格を明示してもなおこのような人称標示を必要とするのである。服部(1944)の言うように、こうした人称活用が「厳密に行われる」、ということは、つまりは動詞における目的語の人称標示が義務的であることを意味する。そして「ni: pjaxlaŋ dun ok 'jixmunt 私は自分の子にこの衣服を与えた (<私は自分の子にこの衣服を「その人」に与えた)」の例文に見るように、名詞の方には格の標示がなく、名詞と動詞の関係を標示しているのは動詞の側についている接頭辞 j- である。このことはつまり、ニブフ語がすぐれて Head-Marking な言語であることを意味している。このような Head-Marking の人称標示は、近隣の言語ではアイヌ語、イテリメン語に見られる(遠藤 1992)。

先にみた主語の人称標示に加え、目的語の人称標示が義務的であるとなれば、この言語は主体客体活用を行う言語、もしくは多項型人称標示の言語ということになる。アルタイ諸言語は主語の人称標示しか持たない。多項型人称標示であるのは、近い地域から見えていけば、アイヌ語、チュクチ・カムチャッカ語族の言語、ウラル語族の言語、エスキモー語、そして北米インディアン諸語、ということになる。

渡部(1992)によれば、「従来、ギリヤーク語には他動詞、自動詞の形態上の区別はなく、1つの形態で両方の意に用いられていた。他動詞として用いられる場合、伴うことの多い不定目的語を表わす3人称単数代名詞と動詞が融合して、現在の他動詞が形成され、自動詞との区別ができた。子音交替はこの融合の過程を逆行するようなものである」とある。これに従えば、現在の子音交替によるシステムも接頭辞 j- に由来することになる。想像をたくましくするならば、ニブフ語はもともとアイヌ語のようにすぐれて Head-Marking なタイプの言語だったものが、近隣のツングース諸語などの影響を受け、次第に Dependent-Marking なタイプの言語に移行してきたと考えることができよう。

他方、渡部(1992)には、「j-, i-, e- の代名詞的接辞をもつ他動詞は具体的な目的語が不定であることを示す。チュクチ語の ine- やアイヌ語 i= の接頭辞が他動詞について不定目的語を表わす(池上 1983) こと——人称など細部の違いはあるが——とあわせて興味深い」(渡部 1992: 100、一部要約)とある。池上(1983)にあるように、アイヌ語の i= は1人称複数包

括形もしくは引用句中の1人称単数・複数形であり、チュクチ語の *ine-* は1人称単数の客体を表わす *ine-* と関係のある形であるので、3人称の接辞であるニブフ語の *j-* とは出自を異にしている。ただ、このことから先に述べたのとは反対方向の歴史的発展の可能性を考えることもできよう。つまり、もともとニブフ語は接尾辞による主語の人称標示しかもたなかったが、アイヌ語などの影響により目的語の不定人称標示を発達させた、というシナリオである。

このようなニブフ語における歴史的発展(変化)についての推測は、今後の研究に俟つところが大きい。特に *j-* を取る動詞のリストアップやその統語的特徴の考察、例文の収集および検討が必要である。上記の服部(1944)の記述にあるように、人間を示す目的語であるか否か、間接目的語であるか否か、なども重要な問題である。これらの問題についてニブフ語内部の状況を十分明らかにした上で、さらにその点を他言語と比較・対照する必要がある。したがって今回は、上記のようなニブフ語の歴史的発展の可能性に関する仮説を提示することにとどめておく。

最後に、抱合の問題について触れておきたい。筆者は現在、いわゆる抱合論争に関する Panfilov および Krejnovich の諸論文が未入手・未見であり、金子(1999)をはじめとする諸論文も十分読み込んでいないため、もとよりこの問題に関して十分に論ずる資格がない。しかし、上記服部(1944)の記述をみる限りでは、ニブフ語における問題の現象は抱合というのに十二分な性格を備えているように思われる。すなわち、服部(1944)の上記の記述を要約するならば、動詞の直前に目的語の名詞がある場合に限って、3人称の *j-* が現れないということになるが、これはすなわち *j-* があつたその位置に名詞自体がすっぽり嵌まり込んでいるものと考えることができる。これはちょうどアイヌ語において、*wakka ku=ø=ku*。「水 私-3人称目的語-飲む」の *ø=* の位置に、名詞 *wakka* がすっぽり嵌まり込んで、*ku=wakka=ku* という表現をつくるプロセスと同じように思われる。'*pxaxlaŋ dox* (子供に)のように、格がついた形式ではたとえ動詞の直前にあつてもこうした現象が起こらない、という事実も、抱合説を支持するものと考えられる。抱合のある言語となれば、近隣ではやはりアイヌ語、さらにイテリメン語を除くチュクチ・カムチャッカ語族の言語ということになるろう。

目的語の人称標示および抱合の問題については、上記のような今後の課題を踏まえた上で、また稿を改めて論じたいと考えている。

2. ツングース諸語との言語接触(借用語の検討)

本節では、高橋(1942)の巻末の語彙と、服部(2000)所収の諸論文に現れる文化的語彙、山口・井筒編(2004)の語彙の三つを検討した。

なおツングース諸語に関して、下記の略号を用いる。

- I 群 エウエン語(Ew)、エウエンキー語(Ek)、ソロン語(S)、ネギダル語(N)
- II 群 ウデヘ語(U)、オロチ語(Oc)
- III 群 ナーナイ語(Na)、ウルチャ語(Ul)、ウイルタ語(Ut)
- IV 群 満洲語(Ma)、女真語(J)

2. 1. 先行研究

服部(1955: 773)では、ツングース諸語からニブフ語が借用した語として、下記のような語をあげている。そこではニブフ語の語形と共に、満洲語、ウルチャ語、ネギダル語、ナーナイ語の形もあげている。この中には「蒙古語、トルコ語などとの関連の認められるものもある」と指摘している。

aišan 「金」, ani 「年」, arak 「酒」, bitŋaŋ 「文字」, čixa 「銭」, dafčiq 「塩」, honi 「羊」, jaaxan 「牛」, jooxan 「綿」, kalyŋ 「氏族」, mankant 「難しい、堅い、猛々しい、値段が高い」, muryŋ 「馬」, njemkan 「千」, oxt 「薬」, pjakka 「鶏」, toxŋaa 「麩」

このうち最後の2語に関しては、対応するツングース語の語形としてあがっているものが、満洲語以外には確認できない。何らかの間違いである可能性がある。満洲語であがっている語形はそれぞれ、fakiri gasha 「鶏」、toho 「未だ成長しきらぬ kandahan (一種の鹿)」である(意味は羽田 1937によった)。

さらにツングース諸語経由と考えられるものの、漢語起源のものとして以下の語があがっている。

bai 「無償で、平凡な」, čai 「茶」, dai 「煙管」, gaa 「鋼」, seta 「砂糖」, žanki 「地位の高い人、役人」

高橋(1942)は antɣa 「客、友」, kuvan 「糸」, meotʃan 「鉄砲」, mambu 「山丹人」, ofang~ofan~ofa 「パン」, ɣotton 「町」などの語をさらにツングース諸語よりの借用とみている。

2. 2. ツングース諸語からニブフ語が借用したと考えられるもの

・ užiq~užuunk 「主」(服部 2000: 66)

ツングース諸語の比較辞典である Tsintsius, V. I. i dr. (1975, 1977、以下「比較辞典」)によれば、主に əji 「夫」, əjan 「主人」などの語形および意味で全ツングースに対応語形がある。比較辞典はさらにモンゴル祖語や古代チュルク語の語形を比較している。

・ tʃafka 「箸」(服部 2000: 100)

比較辞典には(S) sarpa, (N) sapkii, (Oc) sappui, (U) safugu, (Ul) salbu, (Na) sarpii, (Ma) sabka, (J)saah-pen-haah, (p-Mo(proto-Mongolian)) sabxa があがっている。

語形からみて、このニブフ語の形式は、隣接するウルチャ語から入ったものではなく、直接モンゴル語から、もしくは満洲語から入ったものと考えられる。

・ tulŋguʃ 「ただ単に話者が談話の形式で叙述する説話」(服部 2000: 113)

比較辞典は(Ew), (N), (Oc), (U), (Ul), (Ut), (Na)に対応語形を持つ(Ul) tælunŋu をはじめとする語形をあげ、ニブフ語の語形も比較している。

・ kauk 「なし」 (高橋 1942: 195)

ナーナイ語の下流方言における kaukə 「ない」、もしくは(Ul) kawə 「ない」からの借用の可能性はある。比較辞典によれば、(N), (Oc), (Na), (Ul), (Ut)に同源の語がある。

・ nanga 「毛皮」 (高橋 1942: 203)

(Na, Ul) nanta 「動物の皮」からの借用の可能性はある。これと同源の語は全ツングースにある。

・ uřgn-yřgan 「生命」 (高橋 1942: 223)

(Ul, Ut, Na) ərgən 「魂、生命 etc.」よりの借用である可能性はある。比較辞典によれば全ツングースに同源の語があり、比較辞典もツングース諸語よりの借用と見ている。

・ xausal 「紙」 (高橋 1942: 227)

(Ul)xaosalı~xaosalı, (Na)xaosan (意味はいずれも「紙」)からの借用であろう。比較辞典によれば、(N), (Oc), (U), (Na), (Ul), (Ut), (Ma), (J)に同源の語があり、モンゴル語やモンゴル祖語の再構形を参考にあげている。

・ kadz'in-katf'in 「いろいろな」 (高橋 1942: 231)

(Ul, Na) xačm 「さまざまな」からの借用の可能性はある。比較辞典によれば、(Ew), (Ek)以外の全ツングースに対応語形がある。比較辞典はさらに朝鮮語の kadzi 「種類」とともにニブフ語の諸語形を比較している。

・ tšampang~džampan 「蚊帳」 (高橋 1942: 234)

(Ul)jampan 「蚊帳」, (Ut) dappan~jappan 「蚊帳」からの借用であろう。比較辞典によれば、同源の語は(Ew), (S), (J)を除く各ツングース諸語にある。比較辞典は漢語の「帳屏 zhang⁴ping²」をあげ、満洲語に漢語から入ったものと見ている。

・ keoxat~keoxot~keaxat 「こづかい」 (高橋 1942: 237)

(Ul) geoxaton, (Ut) geoxaton, (Na) geoxaton (意味はどれも「乞食」)からの借用と思われる。比較辞典によれば、同源語は(S), (Na), (Ul), (Ut), (Ma)と分布が偏っているので、おそらく満洲語からアムール下流へと広まった語であろう。

・ hoo 「瓶」 (高橋 1942: 247)

(Ul) xoo~xoo, (Ut) xoo (意味はいずれも「徳利」)からの借用語であろう。比較辞典によれば、同源語は(N), (Na), (Ul), (Ut), (Ma)と限られているので、やはりこれも満洲語からアムール下流へと広まった語だろう。ニブフ語にも満洲語から直接に入ったものかもしれない。比較辞典は漢語の「壺 hu²」からツングース諸語に入ったものとみている。

・ pitǰr 「かけぶとん」(高橋 1942: 233)

(Ul) polta 「毛布」, (Na) polta 「毛布」 からの借用の可能性はある。比較辞典によれば(Ma), (J)以外のツングースに同源の語がある。ただ、この語の場合、ニブフ語の語形は借用であることを認めるのに十分なほど似ているとは言えないかもしれない。ただ「毛布」もしくは「かけぶとん」といった文化的な事物であるので、借用の可能性を検討すべきであると考えられる。

・ tǰoxtund 「酔う」(高橋 1942: 251)

(Ul) sokto-, (Ut) sokto- (意味はともに「酔う」)からの借用か。比較辞典によれば、(Ew)以外の全ツングースにある。比較辞典はさらにモンゴル語やモンゴル祖語の語形を比較している。モンゴル語から直接もたらされた可能性も考えられよう。

・ tra 「柱」(高橋 1942: 246)

(Ul) tora~toru, (Ut) toro~torro~toru (意味はいずれも「柱」)からの借用であろう。比較辞典によれば(Ew)を除く全ツングースにあり、さらにモンゴル語やモンゴル祖語の語形を比較している。

・ bos 「布」(山口・井筒編 2004: 26)

(Ul, Ut) bosu 「布」からの借用語であろう。比較辞典によれば(Ek), (Ew)以外のツングースにあり、モンゴル語、モンゴル祖語の語形が比較されている。モンゴル語から満洲語を通じてアムール下流へと広まった語であろう。

・ xasaŋ 「鋏」(山口・井筒編 2004: 26)

(Ul, Ut) xaŋa 「鋏」は、比較辞典によれば(N), (Oc), (U), (Na), (Ul), (Ut), (Ma)に分布し、ニブフ語の語形も比較している。

・ kufaŋ 「糸」(山口・井筒編 2004: 26)

(Ut, Na) kupən, (Ul) xupən (意味はいずれも「糸」)からの借用であろう。比較辞典によれば、分布は(N), (Oc), (Na), (Ul), (Ut)で、もっぱらアムール下流域にのみ分布する。

・ paχ 「窓」(山口・井筒編 2004: 26)

(Na, Ul, Ut) paawa 「窓」からの借用語か。比較辞典によれば同源語は(Ek), (Ew), (S)を除く全ツングースにあるが、基本的にアムール下流域に偏っている。もしかするとニブフ語から入ったという逆の可能性もあり得るかもしれない。

・ mexra- 「挨拶する」(山口・井筒編 2004: 27)

(Ul) mexorači-, (Ut) meexoran- (意味はいずれも「挨拶する、お辞儀をする」)からの借用であろう。比較辞典によれば、(Ek), (Ew), (S)を除く全ツングースにあり、さらにモンゴル語、モンゴル祖語の語形が比較されている。

・ durj 「形」 (山口・井筒編 2004: 31)

(Na, Ul, Ut) durun 「様子、容貌、形、絵、写真 etc.」からの借用だろう。比較辞典によれば(Ew), (J)を除く全ツングースにある。

・ oljoŋ (山口・井筒編 2004: 30)

(Na) olgjan, (Ma) ulgiyan, (Ul, Ut) orgin (意味はいずれも「豚」)のうち、満洲語もしくはナーナイ語の語形から借用したものだろう。比較辞典によれば(Ek), (Ew)以外の全ツングースにある。しかしツングース諸語も周辺の何がしかの言語から借用したものではないだろうか。ただし比較辞典は特にモンゴル語などの語形をあげてはいない。

・ なお 20, 30, 40, 50 を示す数詞にモンゴル語からの借用語はみられない(数詞 10 との組み合わせで表現される)。言語にもよるが、ツングース諸語ではこのような語にモンゴル語からの借用が見られる。1000 は借用語であるとされている(服部 1988: 1411)。

以上の借用を観察すると、ニブフ語に借用される際に、語頭音は無声化されて取り入れられる傾向があること、 $C_1VC_2VC_3...$ のような語の音節は $C_1VC_2C_3...$ のように変容される傾向があることがわかる。

筆者はウイльта語や満洲語に詳しくないということもあり、見落としや気づかなかったものもさらに多くあるだろう。したがって性急な結論を導き出すことはできないが、借用の様子はおよそ次のようである。すなわち、アムール下流域型の分布の語が多く、文化的な事物が多い。借用語形からみると、主にウルチャ語もしくは満洲語に近い形式を借用しているようである。これらを総合して考えると、ツングース諸語とニブフ語の接触が始まったのは比較的最近のことで、ウルチャ語とウイльта語が分岐する以前の言語がアムール下流域に進出して以降のことであると考えるのが自然だろう。

2.3. ニブフ語からツングース諸語(特にウルチャ語)が借用したと考えられるもの

それほど数は多くないのかもしれないが、ニブフ語からツングース諸語が借用したと思われる語も確実に存在する。次の語のように、漁労に関する知識や語彙はニブフ語のほうが豊富であったのではないかと考えられる。

・ mos 「鮭の皮だけを煮て、それを舟の形をした木彫の容器に入れ播粉木様の棒でつぶし、粘り気のあるものとする。それに「はまなす」「えぞすぐり」の実などをつぶして混ぜ込み冷まして寒天のようになったものを食べる」(服部 2000: 68)

比較辞典にはいずれも「魚皮から作った煮凝り」の意味の語として、(N) mosin, (Oc) musi, (Ul) mosi(n) があがっており、さらにニブフ語の語形も比較されている。

2.4. 借用の可能性が考えられるが、どちらの方向への借用か不明なもの

・ wampuk 「手袋」(服部 2000: 64)

比較辞典によれば、ツングース諸語に次のような語が分布している。(Oc) wabaŋgə~uabaŋgə,

(U) wambaxi, (Ul) wagbangi~uagbangi, (Ut) mambaka~majbaka (意味はいずれも「手袋」)。ツングース諸語における分布が偏っているので、ニブフ語から借用した可能性も十分考えられる。

・janpa 「金属片を吊り下げ腰に巻きつけ音響を発する革帯」(服部 2000: 110)

比較辞典によれば、(Oc) janpa, (Ul) janpa(n), (Na) janpaa, (Na K-U) jamkaa であり、ニブフ語の語形も比較している。さらに(Ek) jangu-「音を出す」を参照、とあり、そこには(p-Mo) jaggija「音」をあげている。

・(ut)fix 「老翁、夫」に対し) mam 「老婆、妻」(服部 2000: 118)

比較辞典には、(Oc), (U), (Ul), (Ut), (Na), (Ma)に対応語形のある(Ul) mapa「夫、老翁」、(S), (Oc), (U), (Ul), (Ut), (Na), (Ma)に対応語形のある(Ul) mama「妻、老婆」があがっている。

・malxond, malxund 「多い」(高橋 1942: 199)

(Ul) malxon, (N) malxon~marxon (意味はいずれも「多い」)は、基本的にニブフ語からこれらの言語が借用したものと考えたい。しかし、比較辞典によればナーナイ語のクル・ウルミ方言やビキン方言、ウデヘ語、満洲語にも確かに同源と見るべき語があがっている。「多い」を意味する語は他の多くのツングース諸語で別の語を用いているが、もしかするとこの語が古くからあるツングース祖語の「多い」を意味する語であるのかもしれない。

・s'ik 「みな」(高橋 1942: 249)

風間(1996: 134)に記したように、ヘジェン語、ナーナイ語クル・ウルミ方言、ナーナイ語ビキン方言の三者は、他の周辺言語とは異なる独特の語彙を持つと共に、満洲語の影響を強く受けているという特徴を持つ。風間(1996: 134)ではこの三者をまとめて「アムール中流域言語圏」の言語と呼んだ。この三言語での「全て」を意味する語が、まさにそのような周囲のツングース諸語の「全て」とは異なり、ニブフ語に似た語形を持っている。

ヘジェン語 siakdu~xiaok, ナーナイ語クル・ウルミ方言 s'axu, 同じくビキン方言 s'ææoxok~s'oxo (出典等に関しては風間 1996 を参照されたい)。

上記のような語は、ウルチャ語を中心としつつも、もっとずっとアムール川の上流のほうの言語にまで及んでいる。もしかすると近年の接触以前にさらに別の接触があり、より古い層の借用語が存在するのかもしれない。

3. まとめと今後の課題

前半部の結論として、ニブフ語は類型論的に周辺のどの言語とよく似ているか、という点についてまとめておきたい。当初は朝鮮語との類似があるのではないかとこの予測に立って検討を始めたが、決定的な類似点は見出せなかった。数詞が名詞に後置されること、説述形が副動詞的にも文末の定動詞的にも使われること、ぐらいしか、両者のみに共通する類似点はないように思われる。他方、形容詞が動詞的に振る舞う、という点から、アルタ

イ諸言語や日本語はやはり根本的にニブフ語とは異なっているのではないか、と思われる。

最後に検討した「11) (間接) 目的語に関する人称変化と抱合」の問題がやはりきわめて重要である。そこで見たように、ニブフ語は、本来的に主体客体活用を行い、抱合を行うすぐれて Head-marking な言語であると考えられる。このような条件を満たす周辺の言語はアイヌ語がまずあげられる。しかしニブフ語の文法要素は、問題の目的語の人称要素を除いてはもっぱら接尾的であって、もっぱら接頭要素によっているアイヌ語とは大きく異なっている (中川 2003 参照)。

したがって現時点では、ニブフ語と多くの点で本質的な類似を示す言語を特定することはできていない。検討した項目の数も、その考察の深さも不十分であり、今後のさらなる研究を必要とする。

後半部では借用語を中心に、ニブフ語とその周辺言語、特にツングース諸語との言語接触の歴史について考えた。基本的には、ニブフ語がツングース諸語と接触したのは歴史的に近年のことであったと考えたい。しかしなお疑問の残る要素がいくつかあり、これらの問題についても今後のさらなる研究を要する。

参考文献

- アウステルリッツ, ロバート (1990) 「類型から見たギリヤーク語」 崎山理(編)『日本語の形成』 169-184. 三省堂.
- 池上二良 (1983) 「北方諸言語に寄せて」『月刊言語』 12/11: 38-45. 大修館書店 [池上 (2004) に再録].
- 池上二良 (1992) 「第 14 章 北アジア言語の動詞の構造と格支配: 動作対象の表示に関して」 宮岡伯人(編)『北の言語: 類型と歴史』 297-314. 三省堂.
- 池上二良 (2004) 『北方言語叢考』 札幌: 北海道大学図書刊行会.
- 遠藤史 (1992) 「第 6 章 北方の諸言語における動詞の人称標示」 宮岡伯人(編)『北の言語: 類型と歴史』 165-178. 三省堂.
- 風間伸次郎 (1996) 「ヘジェン語の系統的位罫について」『言語研究』 109: 117-139. 日本言語学会.
- 風間伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の 3 グループ (チュルク、モンゴル、ツングース) 及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか — 対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン, 長田俊樹(共編)『日本語系統論の現在』 日文研叢書 31 249-340. 国際日本文化研究センター.
- 金子亨 (1999) 「ニブフ語抱合論争」『ユーラシア言語文化論集』 2: 1-50. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 高橋盛孝 (1942) 『樺太ギリヤーク語』 朝日新聞社.
- 中川裕 (2003) 「日本語とアイヌ語の史的関係」アレキサンダー・ボビン, 長田俊樹(共編)『日本語系統論の現在』 日文研叢書 31: 209-220. 国際日本文化研究センター.
- 中川裕・中本ムツ子 (1997) 『エクスプレス アイヌ語』 白水社.
- 服部健 (1944) 『ギリヤーク』 東亜民族要誌資料第一号 帝国学士院東亜諸民族民族調査室.

- 服部健 (1955) 「ギリヤーク語」市河三喜・服部四郎(編)『世界言語概説』2: 751-775. 研究社
[服部 (2000)に再録] .
- 服部健 (1988) 「ギリヤーク語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典』1:1408-1414.
三省堂.
- 服部健 (2000) 『服部健著作集 — ギリヤーク研究論集』北海道出版企画センター.
- 羽田亨 (1937) 『満和辞典』京都 [復刻 (1972) 図書刊行会] .
- 山口和彦・井筒勝信(編) (2004) 「服部文庫公開シリーズ1 ニヴフ語 (ポロナイスク方言)
基礎語彙」『北海道立北方民族博物館研究紀要』13: 23-35.
- 渡部みち子 (1992) 「第7章 ギリヤーク語他動詞文の特徴」宮岡伯人(編)『北の言語：類型
と歴史』179-190. 三省堂.
- Krejnovich, E. A. (1955) Gilijakso-tunguso-manchzhurskie jazykovye paralleli. *Doklady i soobshchenie
instituta jazykoznanija*. AN SSSR. Moskva-Leningrad.
- Savel'eva, V. and C. Taksami. (1965) *Russko-nivkhsij slovar'* [Russian-Nivkh dictionary]. Moskva:
Sovetskaja entsiklopedija.
- Tsintsius, V. I. i dr. (1975, 1977) *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskikh jazykov, Materialy k
etimologičeskomu slovarju*, tom 1, 2. Nauka, Leningrad.

Topics in the Typology and Language Contact of Nivkh and its Neighboring Languages

Shinjiro KAZAMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

0. Introduction

This paper consists of two parts: in the former, I give a typological characterization of Nivkh and its neighboring languages, especially Korean and Tungusic languages, even though I also refer to Japanese, Mongolian, Ainu, and Eskimo where necessary; in the latter, I discuss the issue of language contact between Nivkh and Tungusic languages, where the focus is on the lexical borrowing between Tungusic (Ulcha in particular) and Nivkh.

1. A typological characterization of the grammatical aspects

- 1.1. Notes on previous works
- 1.2. Nouns and nominal categories
- 1.3. Verbs and verbal categories

2. Language contact between Nivkh and Tungusic: lexical borrowing

- 2.1. Notes on previous works

2.2. Tungusic lexemes into the Nivkh lexicon

2.3. Nivkh lexemes into the Tungusic (Ulcha) lexicon

2.4. Unclear cases

3. Concluding remarks

To conclude the first investigation of this paper, where we discussed a typological characterization of Nivkh and its neighboring languages, several important features have been identified, even though it is admitted that it is inconclusive at this stage whether there is a language which shows a clear typological similarity with Nivkh.

First, Nivkh is substantially different from Japanese and Altaic languages with respect to the verbal or nominal alignment of the adjective class. That is, in Japanese and Altaic languages the adjective class aligns with the noun, whereas in Nivkh it aligns with the verb.

Second, the agreement and incorporation pattern of object has turned out to be of significance. Nivkh verbs agree both with their subject and object, and may incorporate their object, demonstrating a clear head-marking morphology. This generalization is also true for Ainu. However, in Nivkh all verbal categories but the object agreement are suffixal, and it is this morphological pattern that essentially differ from Ainu, where verbal categories are prefixal.

In our latter investigation of the issue of language contact between Nivkh and Tungusic languages, the focus was on lexical borrowing between these languages. My argument is basically that this language contact has occurred relatively recently. However, there are problematic issues yet to be solved, which are thus important future research topics.